DESIGN IDEA

会津漆器伝統技術 ②

1999.3

24

会津絵

うるみ漆に黄漆で平行線が描かれ、菱形や方形の切箔で、中央部に糸巻形の模様を表現した桧垣、朱漆と青光漆で描かれた松竹梅、金消粉と金箔で表現された破魔矢、この模様の組み合わされた漆絵が、会津絵と言われている。

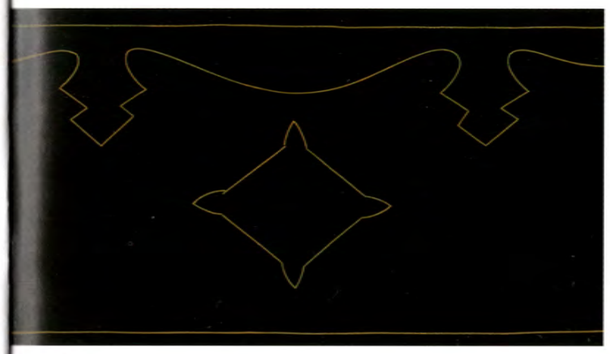
会津絵には、破魔矢と梅の一部に金消粉が使われており、会津で消金粉が作られはじめた文政期頃から、会津絵が描かれたのではないかと推定されている。

桧垣、松竹梅、破魔矢の組み合わせには、信仰的な意味が込められていたものと思われ、ちなみに、松は常緑、常に変わらぬ清節、竹は四季を通じて風雪に耐えて平安、梅は寒さの中にも清香を、それぞれ意味している。

あでやかな色調で表現された、これらの模様は人生の門出を祝う時、結婚、誕生、正月などの祝いごとなどに広く使用されているもので、季節と時代を越えて、すべてのおめでたい席に合う、合理的な模様と言える。

❶

会津絵工程表



置 目

5）網代線描き

うるみ桧描き

6）松・竹描き

桧描き・糸巻き描き

7）松・竹・枝描き

菱形金箔張り

8）梅描き・仕上げ

❷

朱磨き

弁柄漆や黄漆（黄硫）で絵を描き、朱粉（本銀朱）を蒔き付けよく乾かし、これに希釈した漆で摺漆をして朱粉を止め、石砥（研磨用の砥石粉）で磨き上げたのが朱磨きです。

朱磨きの朱は、朱漆で直接描く赤い色とは違い、銀朱独特の金属的な色合いが、黒漆の塗りに朱色という大胆な配色にもかかわらず、品格を損なわないものにしています。

また朱磨きの技法の中に、朱粉を早蒔きし、少し漆が滲むぐらいの時、金消粉をその上に蒔き、石目状に金色を光らせる方法を、朱蒔きといいます。本朱の落ちついた赤い色の中に、金色が輝いて一層豪華な印象になります。

桃山調の豪華な菊桐模様は、明治37年頃から描き始められており、会津で発明された独自の技法です。

朱磨き工程表

1）置 目

5）磨き（石砥磨き）

2）地描き（黄硫描き）

3）本朱蒔き

黄硫漆・丸筆

4）摺漆

磨き（石砥磨き）

緞子絵

漆塗りの艶を消すことで、同色の濃淡で模様を表現する技法で、艶消絵ともいう。出来上がったものが緞子に似ていることから、この名がつけられた。

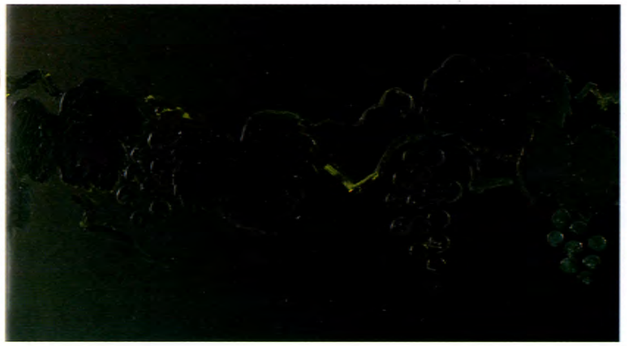
膠、胡粉、水飴（乾燥を調節せつするため）を混ぜた液を温めて、模様を描き（飴描き）、液が乾燥して固まった後、全体を菜種油を付けた布で、炭粉、砥の粉、磨き砂などで、こすって艶消しにする。

それをぬるま湯に浸して、飴描きの部分を溶かし洗い流すと、飴描きで描いた模様だけが、艶が消えずに現れる。仕上げに金消粉で毛打ちして、アクセントをつける技法である。

簡単に早く出来ることから、一時は土産品や引き出物の加飾に盛んに行われたが、今はほとんどみかけない。

緞子絵工程表

1）置目



2）あめ描き

3）胴摺り・仕上げ

炭粉胴摺り

仕上げ（毛打ち）

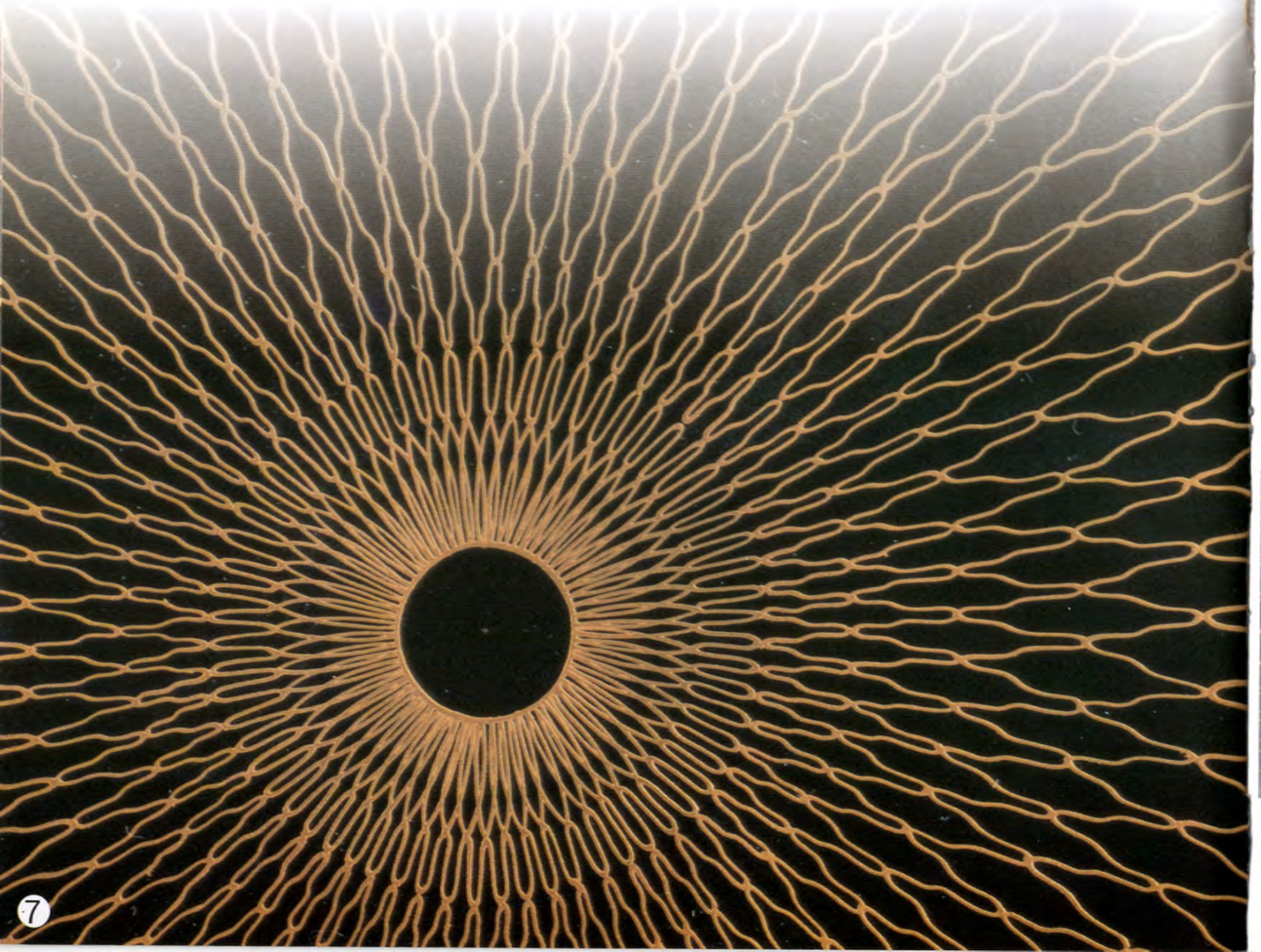
網　絵

網の模様は、古くからさまざまな工芸の分野で愛好され、特に茶道関係でもてはやされた意匠である。

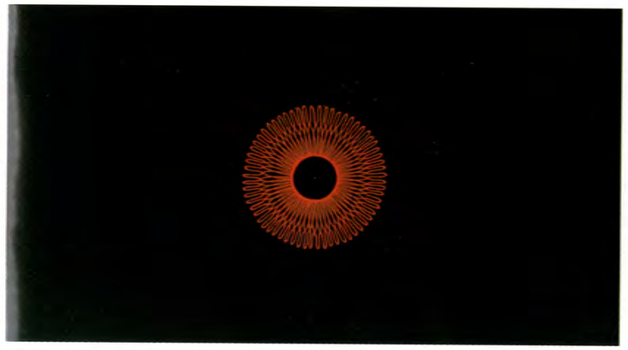
会津では明治の中頃、置目もとらずに、細密な網絵を描きまくった、通称「網熊」という網絵描きの名人、富取熊蔵という職人がいた伝えられており、会津の網絵として有名になった。

網絵は吸物椀などに描かれるのが普通だが、重箱、菓子皿、棗、香合などにも描かれる日本的な模様である。

表現方法として、黒塗りに朱漆描き、朱塗りに黒漆描き、本朱を蒔いたもの、消粉または平極粉を蒔いたものもあり、網の目も細かいもの、荒いものさまざまある。

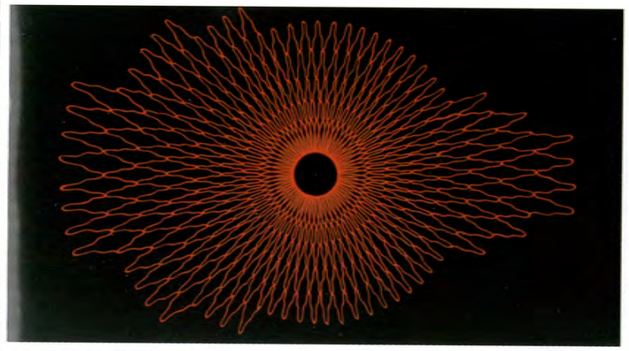


網絵工程表



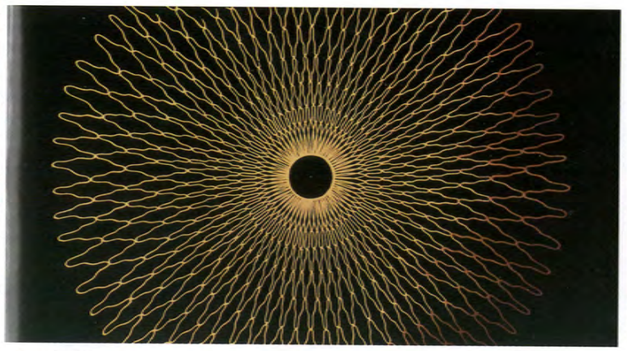
1）ユズ決め

文廻し



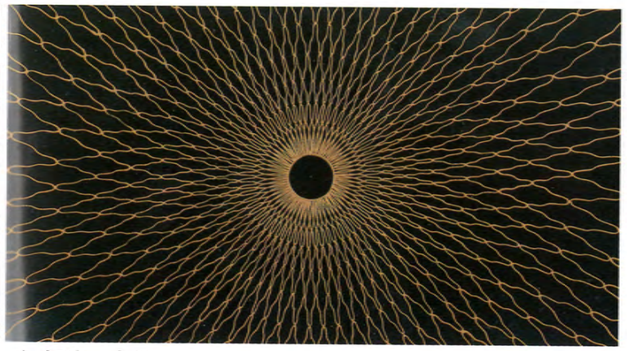
2）段数決め（地描き）

ユズ決め

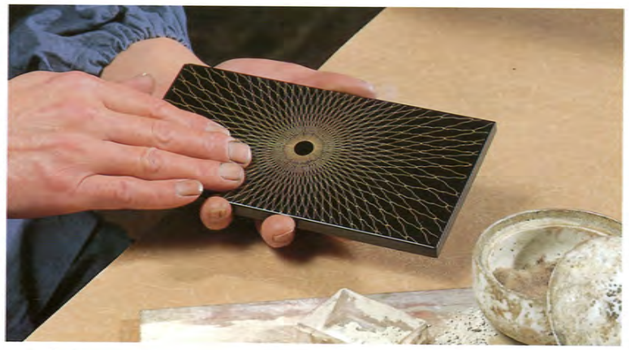


3）粉蒔き

段描き



4）摺漆・磨き



磨き

鉄錆塗

鉄錆塗と言いますが、錆を盛り上げて描く錆絵の加飾技法のことをさします。鉄錆塗の代表的な品物である吸物椀では、蓋表に、梅に鶯の模様を錆で盛り上げ、所々に青貝が埋めてあります。一見して、さびた鉄の鋳造品のような印象がするように仕上げてあります。

錆絵と言っても、下地用の錆とは違い、砥の粉と生漆を混ぜてから、水を混ぜてゆるくした錆を、染色用の絞り筒に入れ、絞り出すようにして、模様を筒描きします。蓋裏は朱塗りの上に、会津の代表的な模様である富士山に帆掛け船が、消蒔絵と色漆のぼかしで描かれています。

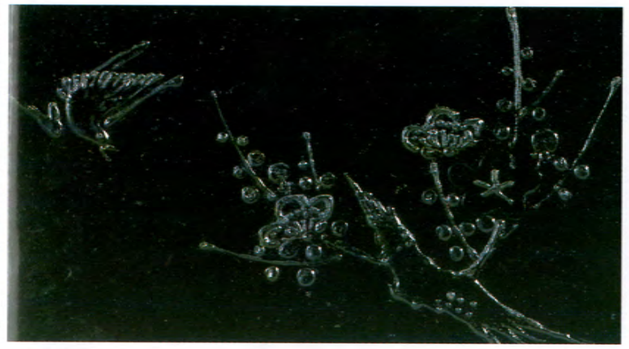
明治20年頃から大正5年頃まで、盛んに行われた技法で、鉄錆塗は女子の手間仕事だったと言われています。

鉄錆塗工程表

1） 置目

5） 磨き（古綿・馬毛・真綿）・艶出し

2） 錆絵描き



3） 地塗

絞り出し器

4） 粉蒔き（地の粉+砥の粉+弁柄）

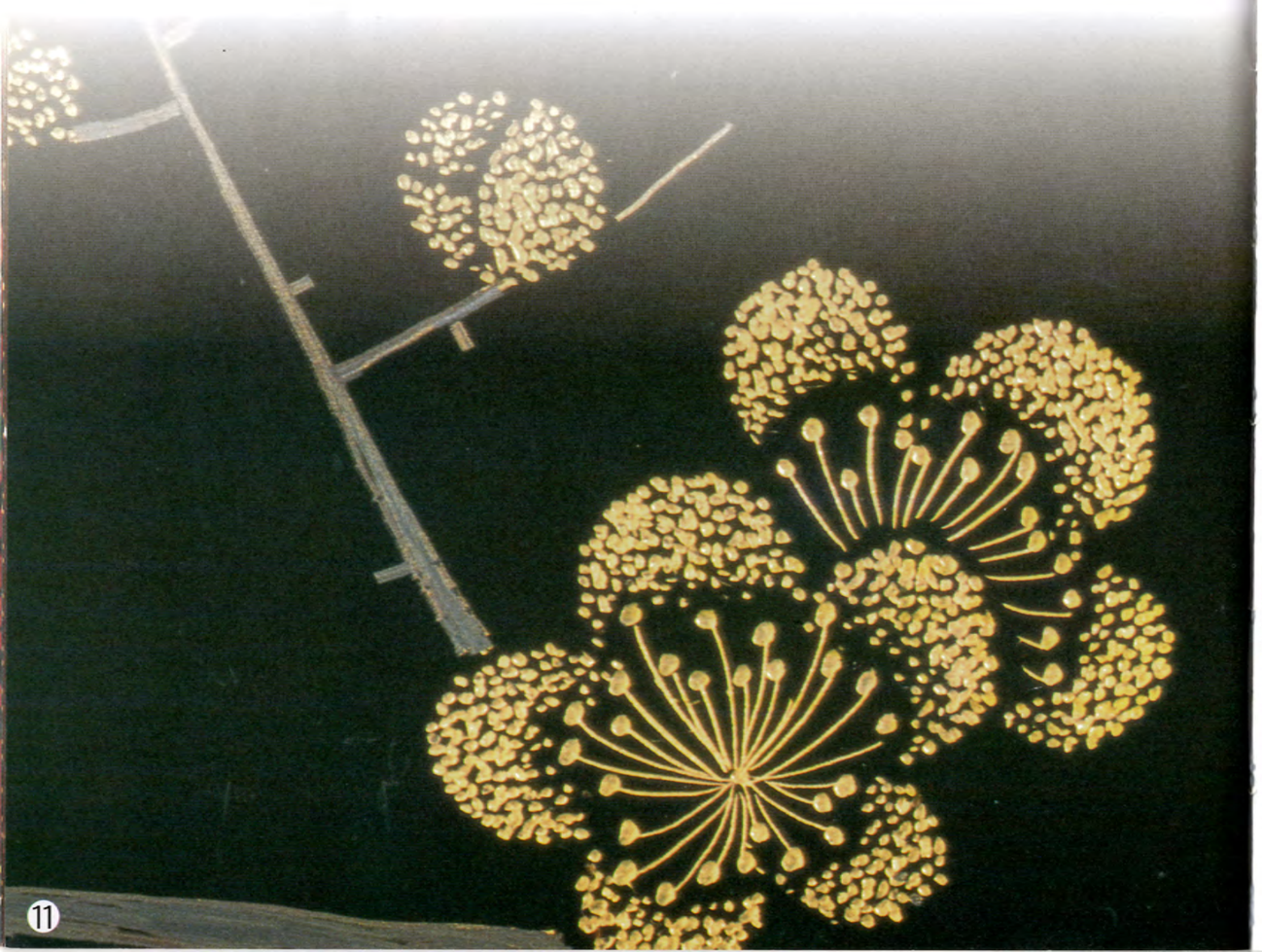
鉄錆盛り上げ

沈　金

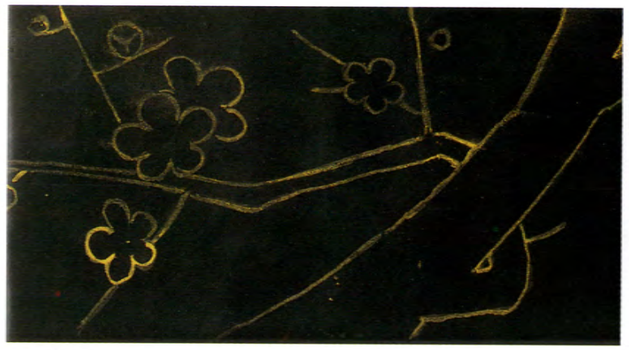
会津の沈金に使用される刃物は、薄い鋼を材料にした独特の刃を作る。そのため、彫りの深さも他産地のものと比較し、浅彫りで軟らかな感じの加飾が特長である。

金箔張りは、朱合漆に釦漆を少量混入した漆を、花綿につけ、彫り溝に摺り込み、金箔を真綿で押しつけるように張る。

会津では、金箔以外に金消粉や朱・松煙などの色粉を入れる場合もある。



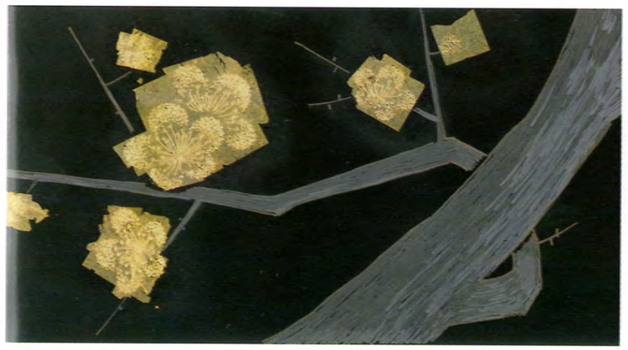
沈金工程表



1）置目

2）輪郭彫り

3）点彫り・線彫り



4）摺漆・金箔張り

5）金箔拭き取り

6）仕上げ

箔移し

点彫り

平極蒔絵

明治14年の褒賞条令の施行によって、金銀木杯の仕事を受けるためには、従来の消蒔絵では規格に合わないので、明治17年に渡辺仙之助・池田清太郎はじめ7人を招き、平極蒔絵の指導をうけた。それ以後木杯の制作が盛んになり、この技法は一般の漆器にも使われるようになった。

会津では金粉の名称から、焼金蒔絵と言われている。平極蒔絵の技法には、平蒔絵と高蒔絵があり、現在も叙勲の木杯に描かれる菊の御紋は、平極蒔絵の技術が使われており、椀や重箱、文庫や正月用品などに、幅広く活用されている技法である。

平極蒔絵工程表

1） 置目

5）摺漆

2）下絵付け（高上げ）

6）磨き（石砥磨き）

3）地描き（金粉・色粉蒔き）

7）毛打ち・摺漆・磨き・仕上げ

4）地蒔き（粉蒔き）

平極粉・真綿

丸粉蒔絵

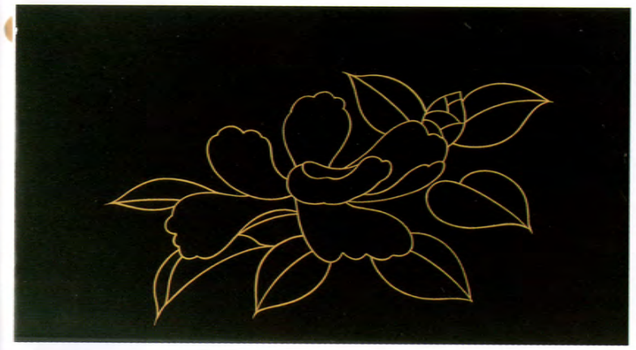
研出蒔絵

会津で丸粉蒔絵が本格的に行われたのは、明治時代でこの時代に完成されたと言われる。

丸粉は、金・銀の地金をヤスリでおろし丸味をつけた粉で、その粒子の大きさによって、極味甚～荒常と呼ばれ、現在では15種に分かれ、又、その用途に応じて、粒子等を調整して使用する。

会津では、金・銀粉を蒔き、乾燥後、彩漆を筆で塗り込み、粉固めをする場合と、生正味漆で粉固めをし「きめつけ」をし、乾燥後、彩漆で2度目の粉固めを行う場合がある。この場合、2色以上の彩漆をボカシ描きする技術を得意とする。

丸粉蒔絵工程表



1) 置目

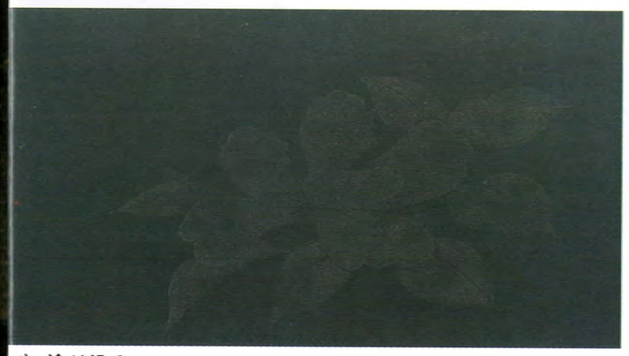
5) 研ぎ出し・磨き

2) 地描き

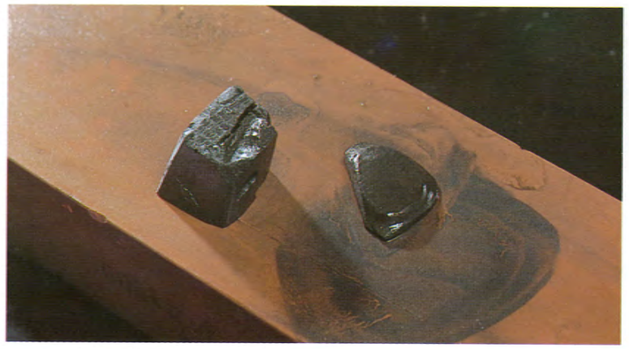
6) 毛打ち・仕上げ

3) 粉蒔き

金粉蒔き



4) 塗り込み



研ぎ炭（呂色炭）

DESIGN IDEA NO.24

（平成11年3月発行）

会津漆器伝統技術 ❷

会津絵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
朱磨き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
緞子絵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
網　絵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
鉄錆塗・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
沈　金・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
平極蒔絵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
丸粉蒔絵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

参考文献
「会津漆器」／「蒔絵の流れ」山内青司著：日本漆工協会
「会津塗」：会津漆器協同組合連合・会津青年漆工研究会

福島県ハイテクプラザ
会津若松技術支援センター
〒965-0846
会津若松市門田町飯寺字村西651-1
TEL0242-27-0834 FAX0242-28-6941